濃、

〔雲萍雜志一〕六德牒記云、綾羅錦繡もて夜の物を造り、薄ものすゞしに蚊のわづらはしきを避るは、定紋に片意地はりて、紙子に淺瀬を渉ることをしらざるなるべし、土燒の火鉢ひとつは道具買も遺念なく、紙もてつくれる蚊牒一張、紙屑かふ者の眸をうながすはともあれ、盜人をして心を動さしむることなかるべし、薄紙一重に世塵をさけ、濕をのぞきて寐冷せず、風を入るゝ時は水濱にあるよりも涼しく、書を見る時は螢雪の窻よりも明し、ねぎたなき姿を人に見せぬばかり、夏侯が妓衣の巧にもまされり、晝はまろめて屏風のうしろへ投込み、折目を正すせわもなし、秋去冬來れば、被りて霜雪のはげしきをも凌げば、一物にして六用あり、彼太宗が歌舞のからうたにはよらねど、われ是に名を與へて、六德の牒とよび、みちこそなけれど、驚きたる山の奥にもおもひ入らず、只このうちに延臥して、やがて出じとはおもひそみけり、

〔柳亭記下〕みゝ紙帳

みゝ枕といふ名は、今も人しりて、みゝ紙帳といふ事はいはざる歟、是天道延寶九年刻追加高政兩吟、なぶらるゝ月は昔の人ぼくろ、みゝを紙帳の寐所へ秋前に兩吟とありて、句のぬしを記さず、河念佛、元祿十四年刻明暮かよふ色里の、たよりまもなきみゝ紙帳一間にさげて、又□□□に載せたる伊勢音頭の唱歌に、四方から目ざます伽やみゝ紙帳、といふ事あり、是何人歟の句を書いれたるなるべけれど出所考へず、

〔守貞漫稿十八雜服附雜事〕紙帳　紙幬也、昔ハ三都トモニ賣歩行キシコト、寛文、延寶、元祿等ノ俳偕ニ出タリ、是亦今京坂ニハ更ニ不賣之、江戸ニテハ見世賣アルノミ、又富民ノ好テ製之者アリ、白紙ニ墨畫等ヲ描カシ、所々ヲ地紙形團扇形等ニ窻ノ如ク切除キ、コレヲ紗ヲ以テハリフサゲリ、中略○江戸賣物ノ紙張ハ、圖略○圖ノ如ク上挾ク下濶シ、自製及別製ハ上下同尺ニモスベシ、

〔皇都午睡三編中〕四季の賣物